



委員会研修会 国分寺市立本多公民館 2022年10月1日(土)

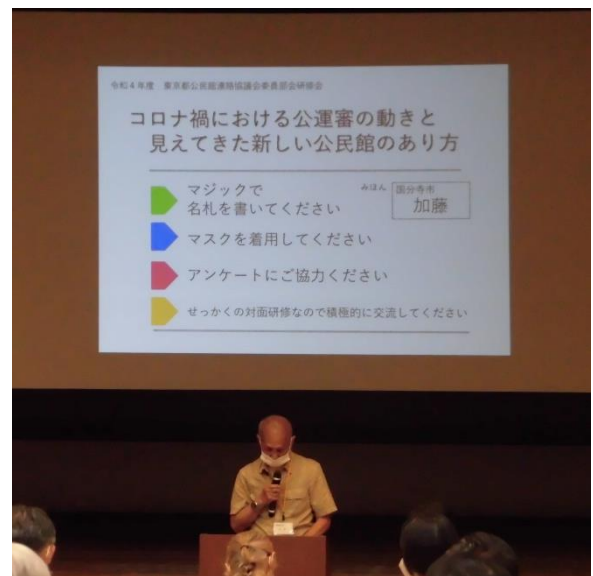


開会の言葉：田中委員部会長

・令和4年度東京都公民館連絡協議会第1回研修会では「コロナ禍における公運審の動きと見えてきた新しい公民館のあり方」をタイトルとして、研修を行うことになった。まず研修の入口として、国分寺市の公運審委員が基調発表を行う。

国分寺でも、2020年(令和2年)の前半期、公民館が閉鎖され活動ができなくなった。その中で2020年10月から2021年6月まで諮問に対して他市に先駆けて検討を行い、答申をだした。この内容と、そこに見えてきたものについての基調発表となる。

コロナ禍の中、その後は、各市でも公民館運営審議会は、できる範囲で諮問等に対して公運審の活動を継続してきた。その成果を、狛江市・国立市・東大和市の3市にリレー発表をしてもらう。ファシリテーターとして倉持伸江先生を招き、シンポジウムを行い、休憩をはさみ、グループディスカッションをし、各グループの内容を共有し、今後の公民館の活動に活かしてもらいたいと考える。



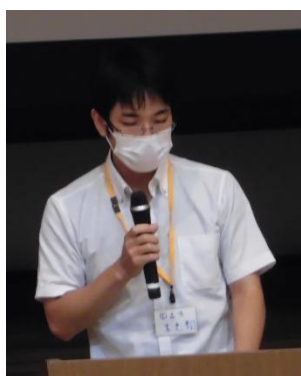
司会：今日の流れの確認(同上)

各グループには、都公連委員部会の会員がファシリテーターとして入っている。

基調発表・国分寺市の事例→資料参照



各市の発表：狛江市・国立市・東大和市→資料参照



シンポジウム：倉持先生・国分寺市・狛江市・国立市・東大和市発表者等 8 名登壇



司会：東京学芸大学准教授・倉持伸江先生は東京都のご出身。専門は社会教育学・生涯学習論でさまざまな公民館活動に実践的に関わってくださっている。コロナ禍のこの3年

間の公民館の様子も分かっている。コロナ禍における公民館、公運審の動き、そして、これからの公民館、公運審のあり方を30分という短い時間であるが、このシンポジウムで探っていけたらと思う。

倉持先生：これからシンポジウムに入るが、シンポジウムの後休憩をはさみ、各グループで委員、職員の皆さんでそれぞれの市や活動について意見交換をしていく。その後グループごとの発表に移るが、グループ内で発表のポイントを確認していきたい。

シンポジウム

国分寺市

倉持先生：国分寺市ではコロナに関わる問題で、早い段階で答申をした。だからこそのコロナの最中の答申ということで、特に議論になった点、答申を踏まえて試行されて、やってみて、見えてきたものを聞きたい。

戸澤委員：公民館としての場所がいかに大切かを実感。休館して再開、アンケートをとり、グループ間、公運審で話し合い、場所がないと何もできないと実感した。公民館活動に参加するグループが弱体化し、参加する人数が減ってきたという現実にも直面した。

倉持先生：コロナの最中のディスカッションだったと思うが、どのように委員が課題や意見を出し合ったのか？議論の進め方は？

戸澤委員：フリーディスカッションが多く、第一期、第二期、第三期と委員長、副委員長が意見を吸い上げ、課題をまとめていった。

倉持先生：国分寺は各館独立方式であり、各館に地域性があるが、それぞれの委員の活動の声を集め、具体例を持ち寄り、情報共有されたのか？

戸澤委員：力を発揮したのが、各館の公運審の後継としてのサポート会議である。地域に密着した委員さんが来ているため、より地域に密着した話が出てくる。人と人が会っていることで生まれるちょっとした会話が次のヒントになっていった。

倉持先生：このプロセスは参考になる。オンラインについてはどのような議論があったか？

戸澤委員：「オンラインって公民館の講座に合うの？」という疑問から始まった。確かに通信手段、SNSは非常に便利だが、一方通行になってしまうのではないかと個人的には馴染まなかった。

倉持先生：公民館らしい事業とは…なんだろうと検討が行われていたので各市からの意見交換をお願いします。

狛江市

倉持先生：狛江市ではコロナ禍のなか新しい生活様式、新しい公民館のあり方、事業のあり方の検討が進められ、事業評価にも取り組んでいる。実際、コロナ禍の最中に事業評価のあり方シートの作成と、公運審での事業評価を行っている。公運審でどのように取り組んだのか、またどのようなやりとりがなされているのか？

職員高橋さん：事業評価シートの作成は担当の職員を中心に、あくまで公民館側の視点で作成。それを公運審委員に見てもらおう。周知・環境等5つの評価項目に分けてある。一つひとつに対して、フリートークも含め、思ったことを直球で言ってもらった。例えば、アンケートの回答結果が「広報狛江」でしかなかったため、新聞を取っていない人は見られない。その人たちへの手立てはどうするのか、救えるのか、FacebookやTwitterを更に頻度を上げて掲載しなければ等の意見も出た。実験教室等は受付開始と共に人気の講座で抽選のやり方を検討。また、チャレンジ学級(障がい者の方向けの学級)については、障がいの対象の範囲等について他市を参考にしてはどうか等、率直な意見が出てきた。

倉持先生：公民館がまず、シートで自己評価をして、公運審の会議の中で説明した上で資料を提供し、公運審でそれぞれの立場から意見や質問をし、それをまとめて更にシートに記入していくというプロセスを丁寧に踏んでいる。評価シートは負担のないようにと、継続できるということがキーワードだった。やってみての想いや実感についてはどうか？

斎藤委員長：評価シートは作成した当時の担当者との温度差があり、形骸化しているところもあった。さまざまな地域を調べたが事業評価をしているところは無いようだった。法律上でも事業評価は記載されており、公運審の仕事の一つでもある。職員も委員も入れ替わりがあっても、継続していけるものを作成するという熱い想いがあった。

倉持先生：職員は公運審に事業の説明や資料の提示をしなければならないが、委員が替わっても評価をするという役割を通して、職員と委員が事業を知り、学び合う関係性を感じた。コロナ禍の中での公運審の活動の一部として、評価の活動を通して改めて見えて

きたもの、浮き出てきたものはあるか？

職員高橋さん：現在狛江市の公民館ではWi-Fi環境が整備されていない。今後、中央公民館の改修が令和6年以降予定されているので、この環境整備によってオンライン等の事業ができる見通し。他にも、実験教室の様子を動画でYouTubeに載せるなど試みているが、オンラインについてはまだ弱いのが現状である。

職員刈野さん：オンラインの講座については、市民の方と共同し、オンライン配信をようやく始めたところである。子ども実験教室は小学生から高校生、理科実験に特化し、おうちでできる理科実験の動画の作成を依頼しながら進めているところである。

国立市

倉持先生：国立市は答申提出直前の貴重な資料を提示していただきありがたい。はじめに、記録としての答申の意義が示され、目次を見ると緻密で丁寧であり、時系列に沿って、色々な立場の方からの意見が集約されている。答申をまとめていくにあたり、意識したこと、まとめるプロセスの中で共有していった問題意識について教えてもらいたい。

末光委員長：議論を進めていく中で色々な立場の対立するかもしれない意見も併記して載せていくことを目標としている。例えば、市民アンケートでは、公民館が夜10時まで開いており安心したが、職員の立場からすると夜間は一人体制であり、容易に解決はできないが、事実を載せていくことを意識していた。

倉持先生：公運審を大切にしよう、教育機関としての公民館であるということを、提言の中にも取り込むべきとあったがどのような議論がなされたか、提言としてまとめられていくポイントを聞きたい。

末光委員長：コロナ禍で、公式な会議が開催できない現状があった。だが、市民と職員とで、広報としての公民館だよりの意見を出し合う委員会が閉館中もオンラインで開催でき、メッセージも残したが、公運審は実施できていなかったのは何故だろうという課題が出た。公運審がもっと主体的に市民の意見を行政に伝えるべきではなかったかということも踏まえそのあたりを意識して答申を作成してきた。

倉持先生：目次の中に、変化に対応できる公運審作りとキーワードがあるが、これは公運審としての反省点や公民館に対する要望等が意見をまとめていくプロセスの中で議論さ

れたのか？

末光委員長：公運審が開催できなかった理由の一つとして、市の制限でインフルエンザ等の緊急時の状況下のため、公民館の事業が休止になっていた。感染拡大防止の観点から市の計画で縮小でなく、休止ということも影響していた。公運審としては教育機関としての公民館のあり方の見直しを要望すると共に、閉館時に公運審はどのような形で議論できるのか、オンラインで深まった議論ができるのかという点を更に考えていきたいという決意表明も含まれている。

倉持先生：公運審が公民館の運営、開館、事業について前向きに責任をもって関わっているというスタンスも感じられ、答申の中に公運審のあり方を問い直す姿勢のあることが印象的である。

末光委員長：昔は実際、地域に入り、活動をしていたのではないか、公民館の中での議論だけではなく、地域に入ることも大切であるという意見もあった。

倉持先生：この答申の目次をみると公運審としてのあり方や、ふりかえり、定義し直しなどが展開されており、また公民館が公共施設、集会施設としてだけではなく、教育機関であることからどのような対応ができたのか検証をされていることも含め、次につながる提言と感じた。

東大和市

倉持先生：東大和市では、職員の立場、公運審委員長の立場での2つの発表があった。諮問する側、答申する側のそれぞれの問題意識がわかった。2つの分科会でどのような議論がなされ、これからのまとめで、今どのような展開になっているのか、議論する事自体、苦勞されているとのことも含め補足をお願いしたい。

佐々木委員長：宿題を受け、2つの分科会に分けて議論を始めた。決まった回数の定例会のため、5人体制の分科会はそれぞれ調整し、話し合ってきた。定例会では分科会の進捗状況を発表し、全体で意見をもらい、それをまた、分科会に持ち帰る等の繰り返しで10月にまとめを行う。公運審委員はそれぞれの団体の代表として、後ろにたくさんの方々の意見を背負ってその代表として参加している。それぞれの団体の想いを受けた代表でありながら、大きい諮問を受けたものを審議会として答申するのであるから、意見の一致、まとめていく必要がある。諮問・答申からできている公運審は、社会教育委員とは異なる

る立場である。会長として委員に意見を出してもらうためにも、会長はどちらの分科会にも属さなかった。短い時間で、宿題をこなそうという途中である。

倉持先生：会長はあえて分科会には入らず、繋ぎ、サポートする役割をしながら、それぞれの分科会で活発な意見が出されたようだが、分科会の進行等はどのようにされていたのか？

佐々木委員長：グループ分けは自分たちで行った。柱は会長が分けたが、あとは自分たちで折り合いをつけながら決めた。定例会で分科会の進捗状況を発表する前に5分程度確認の時間をとり、分科会での仲間意識、結束した上での発表だった。

倉持先生：お互いの経験と信頼関係で成り立ち、活発な意見を出し合う様子が伝わってきた。

職員の立場から見ての公運審の進行の仕方、答申をまとめたその先の事業展開、問題意識についてお聞きしたい。

職員富田さん：公運審のみなさんに非常に活発に考えてもらい会長の進行のもと、事務局として全て委ねている状況である。答申を元に、この時代に必要な事業を展開したい。この答申が足がかりになることを確信しており、市民の皆様還元できるものを目指していきたい。

倉持先生：休憩後、各テーブルで意見交換をしてもらう。発表への質問等はグループ内で聞いてもらいたい。色々な立場の方からの意見を伺い、ポイントや観点が見えてきたのではないか。今日のテーマは「コロナ禍における公運審の動きと見えてきた新しい公民館のあり方」である。コロナという課題に直面し、公運審をどのように進めていくか、どのような役割があるのか等コロナをきっかけに改めて問い直されている部分がある。同時に、公民館のあり方、新しい、これからの求められる公民館のあり方、果たすべき役割もコロナ禍により問い直されたことが発表を通して見えてきた。